古のモンゴル的宇宙観と霊魂観について

包　　龍

はじめに

現代モンゴル人は、大抵が人は死ぬとまた生まれ変わることができるという輪廻転生の観念をもっている。この生まれ変わる段階で何に生まれ変わるか、あるいはどのような人物に生まれ変わるか、または六道輪廻から解脱するかはその人のガルマ（善悪の業因）によって決定されると信じられている。従ってその世界観が天界、地下界、（地獄）中間界などに分かれるのである。

この明らかな仏教的思想をモンゴルの人々が本格的に受け入れ始めたのは、いまから430年ぐらい前のことである。この歴史も長そうではあるが、北方民族やモンゴル民族の歴史に比較すると、まだ浅いものだといえる。

では、こうした仏教的宇宙観や霊魂観を受け入れる前、あるいは仏教の流れが行き届かなかった辺境地のモンゴル人社会ではどのような世界観がみられるのかを考察する必要がある。チベット仏教がモンゴルに流入し始めたのは、西部では1570年代で、東部では1620年代のことである。「ハイシッヒ1998など」モンゴル帝国時代には、チベット仏教を始めとする多くの宗教がモンゴルを改宗しようと努力した様子はあったが、モンゴル本土（原住地モンゴル高原）にはそれほど浸透しなかったのである。一時フビライ・ハーンがチベット仏教サキヤ派を信仰し、パクパ・ラマを国師にしてモンゴルの貴族たちを仏教化する時代はあったが、これもモンゴル帝国の崩壊によって、モンゴルへの影響が失われたといえる。中国から北の本土（モンゴル高原）へと追放された人々は仏教を持ち帰ることができず、再びシャマニズムを信仰するようになった「エルデムト2001など」。そのため北元時代の人々もシャマニズムを信仰し、昔同様な世界観と霊魂観をもっていたと考えられる。

しかし現在では、モンゴル・シャマニズムの宇宙観や霊魂観に対する説明は非常に複雑な様子をみせている。仏教あるいは他の宗教の影響で古代モンゴル人の持っていた宇宙観や霊魂観が徐々に薄れて行き、仏教的宇宙観や霊魂観と混在した状態といえる。こうした中、一部のシャマンあるいは研究者でさえ、この混在した様子から抜け出せずにモンゴル・シャマニズムの宇宙観や霊魂観に対する誤った説明を行っていると思われる。

それはつまりシャマニズムに地獄が作られたり、地下界があったり、あるいはシャマンの霊魂が生まれ変わるなどといった解釈である。しかしこれらは明らかに仏教寄りの世界観であって、シャマニズム本来の独自性を表すことができていないようである。

またたとえばモンゴル帝国時代のモンゴル軍の強さを分析した研究にしても、従来はほとんどがモンゴル人の騎馬民族的性格からの研究や軍の組織への研究または兵術や兵器の研究などによって説明が試みられる。しかし実際モンゴル人の宇宙観や霊魂観などの内心的なものがどのように影響していたかに対する研究は、世界またはモンゴルにおいても余り行われていないようである。では、以下いくつかの物語や研究などから当時のモンゴル人の宇宙観や霊魂観を考察してみよう。

天・地の生成の物語からみた宇宙観

モンゴルの人々のあいだで天を父の存在になぞらえ、大地を母に比喩することは太古の時代からいわれてきた。つまり、天は男性的神の象徴となり、大地は女性的神の象徴であると考えられる。そして社会の発展につれ、男性の政治や軍事面での役割が上昇し男性の地位が上がることで男性的神である天の地位も上がって、全ての神々の首位に立ったのだろう。従って大地は万物の形を作る母性の役割を果たすのに対し、天は熱や光を与え、雨を降らせることで、生命を吹き込んでいると考えられていた。

モンゴルでは大昔の物語や伝説を伝えるとき、語り手が以下の詩を読んで始まる場合が多い。

スンブルの山[注1)] が丘くらいのとき
スーンという海が池くらいのとき
ガルバラクチ檀の樹[注2)]が枝くらいのとき
宇宙や世界が卵くらいのとき

と始まるが、ここでは単に物語が遠い昔のものであることをアピールしているようになっているが、一方では、すべての物事が発展し、宇宙万物は変化の中に存在するものだというのを教えるものである。

フルブは「大昔天と地は合体した一大物体であった。それが切れ離れる中で、天・地が誕生した。」「フルブ2006,57頁」という物語を現代科学にてらし、「宇宙はビッグ－バンという爆発によってばらばらになった、というのと似ている」「フルブ2006,58頁」と説明している。要するにモンゴル・シャマニズムは、科学的説明ではないが、何らかの形で現代科学的説明と近いことを物語っていたという。

また満昌の『蒙古薩満』（モンゴル・シャマニズム）によると「昔々、天上に人間、地上には動物

[注1)] 古代モンゴル人が考えた世界の中心にあるとされる山。
[注2)] モンゴルの人々の想像上の樹、不老不死で永遠に生長しているとされる。

が暮らしていた。そして天上の九つのテングル（天の意味のモンゴル語）には一人の妹がいた。当時邪教の先生というのがおり、九つのテングルを威嚇して、その妹を嫁にすることを承諾させたのである。これを聞いた妹は、邪教の先生の暴虐な性格と醜い顔を嫌い逃亡し、地上に来て動物たちと一緒に暮らすようになった。日々が経つにつれ、天上の兄たちが懐かしくなり、とうとうある日兄たちのもとへ戻ったのである。そこで地上の生き物たちは女性テングルのことを思い懐かしんで、皆で相談し、その形を作ることを決定したという。生き物たちは自分たちの身体の美しくてよい部分を少しずつ出し合わせたところ、同じ形のものを造りあげたという。これによって天の下、地の上で人間というものが誕生し、万物から栄養をもらい繁殖し数が増えたという。万物の身体の一部分が入っているため、人間各々の顔立ちや性格が違っているという。」「満昌1990,52-53頁」

この物語では、天が人間に命を与えた、そしてその命が万物によって支えられていることを上手く表現したものである。例えば地上で人間というものが誕生し、万物から栄養をもらい繁殖し数が増えた、そして万物の身体の一部分が入っているため、人間各々の顔立ちや性格が違っているというところにその世界観が上手く表現されている。

モンゴル・シャマニズムでは人間は天から命をもらい、万物から栄養を取っていると考えられているため、天地万物を敬い、感謝するのである。またこの物語から読み取れるのは、万物の首位に立つ人間とはあとから出現したもので、その前地球上にいたのはやはり他のいきものばかりだったということである。これも現代科学が言う恐竜の時代があってその後の時代が人間の時代になっていることと似ている印象を受ける。

『元朝秘史』の冒頭に「チンギスハーンの根源は、上なる天神よりの命運を以って生まれた蒼い狼であった。その妻は淡紅色の牝鹿であった。」「小澤重男，訳1997,13頁」というのがあり、ここでも天と関係ある動物によって人間が生まれているとされている。当然狼とはモンゴル人のトーテムであったと言われることからこんな物語が作られたのであろう。しかし現代科学でも、人間は猿から変化したといわれているが、マダガスカルの原始的なキツネザルなどをみると比較的に狼に似たような顔をしている。こうしたことから考えるとどちらから生まれても、変化しても余り変わらないようである。当然上記は祖先神話であるため直接生まれたと言うのに対して、科学は変化したというのがその違いであろう。

またこんな物語がある。「この天地創造以前は一切が水であって、天も地も存在しなかった。そのとき神々の中で最高の神であり、全ての存在の創めであり、人類種族の父であり母であるテンゲルガリンハン[注]が現われ、先ず自分と同じような形態の人間を作ったというのである。しかしその人間

[注] テングルガリンハンとは、天と火の主の意味で、ここで使われているのは天地の創造主である。

の野心を見抜いたガリンハンは人間から飛行力を奪ったので、人間は底知れぬ水溜りに転落し、溺死せんばかりになった時、ガリンハンは人間の住む平坦な大地を造り、大地が浮流しないように三尾の巨大な魚を作って、その背に大地をおいた。しかるに人間は自分のために全地域が沼や丘で覆われた凹凸の国を作ったので、ガリンハンはこの人間のやり方を見て大いに激怒し、これをエルリック（地獄）注1) と名付けて、光の国から追放し闇の国へやったのである。

そこで、ガリンハンは新造の大地の上に人数を殖やす必要を感じ、先ず多くの枝をもつ大木を新たに地面に成長させ、その各枝の下に人間を作った。これがすなわち新人類で、現在世界に住んでいる各種族の祖先である。しかし闇の国エルリックは、新住民の美しくて、善良なることに嫉妬し、暴力をもって彼らを悪魔のもとに引き摺り込んだ。ガリンハンは、エルリックに誘拐された人間を哀れみ、エルリックを地下の闇の国第三階層へ追放した。一方ガリンハンは天界の一番上に住み宇宙万物の指導を行っているという。」「芝田研三1940,118-120頁」

この物語をみると、上述した他の物語と明らかに違う点がある。それは宇宙が三層からなり、上は天、あいだは地、下にはエルリックが存在し、我々人間はこの地上に住んでいて地下のエルリックに襲われる危険もあるということである。物語から直接読み取ることはできないが、この物語はモンゴル人が仏教的宇宙観を受け入れたあとのものだと考えられる。というのはこの物語が上記した物語や神話と違って、地下界とエルリック（地獄）が出現するからである。

これらのようにチベット仏教がモンゴルに流入する以前の物語から世界観を読み解くと、以下のような原理が分かる。まず宇宙は天と地があって、地上には動植物が生息していること、また人間は大地や万物から栄養を取り、天から光や熱をもらっている。そして宇宙は一つの巨大な物体が割れ離れてできたものであり、万物は変化の中に存在するといったことなどである。

モンゴル・シャマニズムの宇宙観

現在仏教化したシャマンあるいは人々のあいだでは三層宇宙、または多層宇宙という概念もある。孟慧英氏は「モンゴル・シャマニズムの考えによると天は、九層、三十三層、九十九層などのそれぞれの説がある注2)」「孟慧英2000,190頁」と指摘している。当然現在ではこのように天に層があると考えるだけでなく、地下にも層や地獄があるとの概念を持つようになっている。しかしこうした多様な宇宙観が入ってくる以前のモンゴル・シャマニズムのオリジナリティを考える必要がある。

エルデムト氏は「モンゴル・シャマニズムでは、魂と天国のような概念は存在するが、地獄という概念は見当たらない」「エルデムト2001,58頁」と書いている。要するに前の物語にあったエルリック

注1) この言葉の現代モンゴル語の意味は、「地獄」である。
注2) モンゴルでは天、つまりテングル神が九十九名、あるいはそれ以上いて各々の役目があると考える。

（地獄）はなかったという。煎本孝氏がホルチン・シャマンＳ氏を現地調査した論文には以下のように書いている。

煎本「天は上空にいるといっていますが、地下には何かいるのですか？」

Ｓ氏「海（水）の主ロス（ｌｕｕｓ「lus」）がいる。」

煎本「地面には何かいますか？」

Ｓ氏「地面には我々人間がいるのです。地面の上の中間の宇宙に我々がいるのです。」「煎本孝 2002,432頁」

というシャマンＳ氏の宇宙観を様々な観点から説明した後にこうまとめている。

「内モンゴル・シャマニズムの宇宙論の特徴は天、地、地下という垂直宇宙において、天と地の中間に人間がおり、シャマンが山や樹や鳥という象徴を用いて、宇宙の神々と交流するという点にある。」「煎本孝　2002,434頁」

またモンゴル人が天・地を父と母に準えることから、「母と父、地と天などは二元論的宇宙観の同一とまとめている。」「煎本孝2002,434頁」つまり二つの対立項の同一化によって新しいものが生まれると考えるからである。そして天・地・地下の垂直宇宙論は存在するにしても、地下ではロス（水あるいは水の主）がいるのみで、決してエルリック（地獄）がいると言っていないのである。

これと同じくフルブも「土地の主をサブダグと言い、湿気や水の主をオス（モンゴル語の水）あるいは外来語でロスluusと言った」「フルブ2006,75頁」と書いてある。つまりサブダグあるいはロスは地下界のものではなく、土地や水の主（神）であると強調するものである。こうした例から考えると今モンゴルで言う地下にはエルリック（地獄）がいるという考えは、外来宗教文化の影響によるもので、本来のモンゴル的世界観では地下には水があり、天と地のあいだの空間に人間がいると信じられている。つまり古代モンゴル人における宇宙とは天と地の間の空間であったと考えられる。

ウノ・ハルヴァの『シャマニズムアルタイ系諸民族の世界像』「ウノ・ハルヴァ1971,40-48頁」からまとめると、アルタイ系諸民族の中では、天に層があると考えるかのように地下にも層があると考える民族もいるが、これは天上の層を地下に反映したのみであると説明している。また他にも地下に空洞があるなどの考えをもつ民族もいるという。ところがこれらの例では、地下に地獄があるとの概念を持つものはなかった。特にモンゴル系の民族ブリヤードの例では、シャマンの魂は天上へと昇るのみで地下へと下る考えはなかったのである。

また13世紀・14世紀にそれぞれ書かれたモンゴル学研究に広く知られる『元朝秘史』と『史集』から窺っても、当時のモンゴルの人々の天・地への信仰はよく見られるが、地獄への信仰あるいは恐怖などは全く見られないのである。これは単に偶然的な現象ではなく、当時の人々のあいだでは地獄という概念はなかったからだと考えられるのである。

しかし現代モンゴルでは天に層があり、一番上に住むのはホルムスタ・テングル（聖なる天）であり、その下に他の諸々の天を各階段に並べるという考え方もされている。そして現世で善人だったのかあるいは悪人で生きたのかをはっきりさせる最後の審判もあり、この審判によって人間がエルリックに落ちるなどが決められる。しかしこれはあくまでも仏教化し、想像能力にあふれた人々が考えることで、少なくとも歴史資料などには見当たらないようである。

また人間が直接に行くことができず、魂を通して必ず行くのは地獄であるとされている。少なくともモンゴルにおける地獄とはかなりあとの時代に持ち込まれた観念だと考えられるが、何時からというはっきりした答えはない。エルデムト氏は「シャマニズムのような〈地獄〉のない宗教が、天から人を支配する力を弱めていたため、元のフビライ・ハーンがチベット仏教のサキヤ派を国教にした」「エルデムト2001,59頁」と指摘している。要するに地獄があってこそ、天あるいは仏の意思と一致する君主や権力者たちの意思が人々に浸透しやすいことを指摘している。権力者の意思＝天の意思であるため、逆らうものは天あるいは仏の意思に逆らっていることになるため、地獄に落ちるという考えである。

霊魂観

霊魂と言えば世界のどの宗教や民族を問わずほとんどに存在する基本的で、重要な観念の一つである。モンゴル・シャマニズムも例外でなく、しかも万物霊魂あるという霊魂論を基礎にして、成り立っている。肉体と霊魂を分けて考える二元論的考え方に基づくものである。そして霊魂は万物に付着し、その活動を行っている。こうした霊魂は単なる霊魂とはいえども、様々な生き方をもっているという。

霊魂は、寝ているとき、起きているとき或いは患病中を問わず人間の肉体に出入りすることができると信じられることと、死んだ人の霊魂もその死体から離れて様々な世界を飛びまわることができるという説に基づき霊魂独立論が誕生している。そして本来のモンゴル・シャマニズムでも、霊魂が不死であるという概念はあった。しかし霊魂は生まれ変わる、すなわち輪廻制をもっているという概念はチベット仏教が入ってくるにつれできたもので、それ以前はなかったと考える。そして現在のホルチン地方のシャマニズムにもこの霊魂不死や輪廻しないという概念がシャマンたちのあいだで残っている。

2004年秋、筆者がホルチン庫倫旗のシャマンＡ氏を訪問したとき彼は言った。「シャマンは死んだら生まれ変わることができないため、自分の子供あるいは甥や姪などの親族に乗り移るかたちをとることで、つぎの世代にもシャマンが誕生するのだ。私もその通りになるのだ」と言った。つまり古代モンゴル人の霊魂不死や輪廻しないという考えがこうした形でいまも残存していることになる。要するに霊は子孫などに影響を及ぼすことができるが、輪廻転生はしないという考えである。

これに関係してエルデムトの『蒙古薩満教及其思想史』（モンゴル・シャマニズム及びその思想史）

にはこんな伝説が紹介されている。「ラマがモンゴルに入ってくるとき、シャマンたちは断固として戦った。ラマたちはシャマンに勝てないため、密かに天に告訴した。ホルムスタ・テンゲル（聖なる天）も一方的なことを信じ、シャマンたちを処罰した。そこで一部のシャマンはラマたちと融合し〈白方〉のシャマンになったため、生まれ変わることができる。しかしもう一部はラマに投降しなかったことで〈黒方〉[注1]と名付けられ、生まれ変わることができなくなった。そこで〈黒方〉シャマンたちは死んだあと身体をバラバラにして鳥に食べさせ、天に逆らった罪を償い、生まれ変わりを望んでいるという。」「エルデムト2001,47頁」

この伝説から読み取れるのは、輪廻の概念がラマたちによってモンゴルに伝わったということである。本来モンゴル・シャマニズムでは、魂の輪廻はなかった。そしていまのシャマンたちが言うように自分たちは生まれ変われないとは、本来モンゴル・シャマニズムの霊魂観の根跡だというのを上述したＡ氏の例で分かる。またシャマンの死体の葬送方法については鳥葬にするか、あるいは人目のつかないところで死体をバラバラにして樹に吊るすなどの方法[注2]は、シャマニズム本来のものであった。地方によって異なるが、ラマ教が余り浸透していないブリヤード・モンゴル人の中では次のような手段がとられることもある。「シャマンの棺を、同じ高さの四つの棒を立ててその上に置く。そしてそのシャマンの使っていた道具は、周辺の樹に吊るして置くのだ」「ウノ・ハルヴァ1971,273頁」という。何れにしてもこうした習俗はモンゴル古来のもので、上記の伝説のようにラマ教の影響で罪を償うために行っているわけではないのである。そのためこの物語自体はラマ僧によって作られたのか、あるいは仏教思想を受け入れた者がシャマンたちを軽視するために作ったものであろう。

モンゴルでは魂が身体を離れ七日から四十九日のあいだである場合、それを呼び戻すことができると信じ、呼び戻す儀式を行う場合があった。モンゴル語では「ソヌスドーダフ」と言う。この「ソヌスドーダフ」儀式はシャマンが行う場合と民間で行う場合の二種類がある。シャマンが行う場合、シャマンたちは個々の巫術を通じて、霊を呼び戻す仕事を行っている。こうした仕事は神と霊魂の二つの目に見えない抽象的概念を現実世界と組み合わせることの中で行っているため、かなり主観的なものと言える。民間での儀式はシャマンの儀式の簡単な部分を利用することで行っている。こうした民間の儀式はおそらく霊魂が悪霊に捕らわれていない場合、あるいは遠く離れていない場合などに行った

[注1] 脅威や呪いを行うことを選ぶ場合には、黒方シャマンとならねばならないとされる。白方はチベット仏教と融合的シャマンで、黒方はチベット仏教と徹底的に戦い続けているシャマンのことだという説もある。しかし満昌（1990,42頁）によれば、黒方と白方の区別はチベット仏教がモンゴルに入ってくる以前から存在したことが指摘されている。またフルブ（2006,47頁）によると、伝統的には白と黒に分かれるがチベット仏教の普及後、仏教寄りのシャマンが黄方のシャマンとされ、伝統シャマンはすべて黒方のシャマンと呼ばれるようになったと指摘している。

[注2] これはシャマンの葬式の一種でモンゴルでは「スルルフ」といい、現在では行われていない。人目のつかないところでシャマンの遺体をバラバラにし、樹に吊るしておくというやり方である。

であろう。そしてシャマンたちが行っていた「ソヌスドーダフ」儀式の中でホルチンによく歌われる祈禱詩歌にはこんなものがある。

鷲の羽根で飾った矢ホイ
九色のシルクを付けた矢ホイ
イソンゲル（地名）＊＊を呼んでいるよ
来て、来て速く来てよ
ホロイ、ホロイ、ホロイ注1)
鷹の羽毛を付けた矢ホイ
五色のシルクで飾った矢ホイ
タブンゲル（地名）の＊＊を呼んでいるよ
来て、来て速く来てよ
ホロイ、ホロイ、ホロイ

今日こうした歌詞はシャマンだけでなく、普通の人々のあいだでもよく歌われるようになっている。魂を呼び戻すとき大抵こうした歌を中心に、魂が帰ってくることを願って、シャマンあるいは儀式や歌に詳しい人たちが歌っていくのである。

ホルチン注2) ではいまでも死んだ人の名前を直接言うのを恐れ、死んだことをその通りに死んだと言うのも恐れる。例えば＊＊の爺さんが「仏になった」あるいは「天国に行った」などで言いまわすのが普段である。モンゴルでは、祖先の霊はその子孫を守るような守護霊に成り変るからである。こうした守護霊はときには子孫を守り、またときには子孫に害を与える場合もある。そのため子孫たちは霊に対してなるべく失礼のないようにするのである。13世紀にモンゴルを訪問したヨーロッパ人使者ウイリャム・ルブルグはこう書いてある。「彼らが宴会を行い、酒を飲むとき最後に北に向いて酒を挙げる。これは彼らが自分たちの祖先の霊を敬っているのである。」「ゲレルチョクト訳1983,279頁」こうした例からは、祖先の霊を敬うことは、かなり昔からモンゴルにあったと考えられる。

モンゴル・シャマニズムでは、霊は死後の世界でも現世のような生活を求めると考える。つまり死んだ人間の霊がまた現世のように自分の飼っていた家畜の霊を飼い、愛する人の霊を愛し、支配下にいた人々の霊を支配するという考えである。仏教化する以前のモンゴルで人が死ぬと、その後できるだけ沢山の家畜を屠殺し陪葬したのはこうした考えに基づいたのであろう。

注1) 呼び戻すために使う決まり言葉で、帰っておいでという意味をもっている。

注2) いまでは内モンゴル東部の興安盟や哲里木盟の多くを占めるモンゴル人をホルチン・モンゴル人という。ホルとは弓矢のことで、チンギス・ハーンの弟のジュチハサルとその子孫は弓矢を扱うことに上手だったことから彼等の率いる人々が次第にホルチン部族になったという。

エルデムト（2001，45-46頁）は「人が死んでも、霊はあの世で生きているときと同じ生活をおくり、生きているときと同じ集団で生活すると考える。そのため、家族の系統にもとづき共同墓地を作るのである。そこで年や世代に分けて、上になるものは右の列に並ばれ、右から左へと下っていく」と書いてある。要するに死後の世界でも現世と同じく親族同士の集団で暮らすようにと考えたからである。

ニマーの『霊魂・偶像・信仰』（1998,25-26頁）によると、「モンゴルの人々は昔から自分の魂を大切にし、愛し、自分から離さないようにする。自分の魂が汚れることにより、様々な障害や病気が自分にやってくるものだと信じる。そのため汚れた場合は、火などを使って清める。急に何かによる恐怖や恐喝で、魂が逃げてしまうとも信じ、昔の人々は、急に驚愕したりすることのないように生活のルールを作っていた。また魂が殺されることを恐れ、特に魂を守るため、何か動物やものに魂をとり憑かせて保存することもあった。そのような動物やものには、獰猛な動物（虎や狼）や硬い石などがあった。現在では身の危険を感じるところに行くには、命の守り神というのをもって行くようになっている。しかしこれはあくまでも魂を保存する習慣からきたものだと考えられる」と言っている。

そしていまでもこうした習慣の一部はモンゴル人の中に残っていると思われる。例えば人が精神的ダメージから立ち直らないとき魂が抜けていると言って、霊をよび戻すなどの儀式を行う場合がある。人間の霊とは人懐こくて、優しい性格を持っているため、呼ぶときも優しくて軽やかに詠うのがポイントだという。

ロブサンチュイダン（1981,51頁）は「かつてのモンゴルの習慣では、男が生まれると家の外に弓矢を置いて、女子が生まれると家の外には赤い布を置く。」と書いている。つまり生まれて一ヶ月になっていない母子がいる家の外にこうしたものを置き、汚れているものの入ってくることを拒んでいることを知らせている。これには本来子供が風邪を引き易いのは、誰かが入ってくると子供の霊がその人について行き易いからだという言い伝えが原因していると考えられる。

モンゴル・シャマニズムでは、悪霊は簡単に人につくものなので注意しなければならないと考える。特に死んだ人に近寄る、墓の上を通る、または竜巻などに吹かれる、夜中に何処かへいくなどのときは悪霊に捕らわれ易いという。それは、この時間帯や現象には悪霊が潜み易いと信じられているからである。実際2004年秋、シャマンN氏を訪問したとき、彼はちょうど治療中であった。そのとき彼は女性患者に対して「あなたは家畜を探すため、夜中古い墓場を通ったのが原因している」と診断していた。要するに注意すべき二つの点に当てはまるため、悪霊に捕らわれているということであろう。そしてこの診断が正しいかどうかは別にして、モンゴル・シャマニズムでは霊に対するこうした信じ方があることが確かめられていると言える。

古代モンゴル人は霊魂が血の中にいるということから、血を流すことを嫌がる習性があった。『元朝秘史』から例挙すると、ジャムハが五人の友に捕らわれてチンギスハーンのところに送られてきて、チンギスハーンの勧告を聞かず死を選んだときに、「友[注]が赦しを下さり、我を殺めしむ時、血を出さず殺めしめよ。」「小澤重男訳1997,59頁」と言った、というものが見られる。これは明らかに霊魂を保護しようと思ってそう言ったのである。そしてこの習性が今日まで残っていると思われるのは、モンゴル人が食肉のため、家畜を屠殺するとき、その家畜の腹を手の入る分だけ切り、そこから手を入れて大動脈を切るのである。これはなるべく血を出さないためであろうと考えられる。そして健全な霊は死んだ人や動物の額の穴から抜けていくと信じられているため、こうした習性が生まれたのであろう。

またニマーの『霊魂・偶像・信仰』(1999,4-5頁) によると「霊魂は寝ているとき或いは病気のとき人体から離れ易くなるため、色んな工夫をし、人体から離さないようにしている。例えば夜、子供が寝ているとき、寝たままに家を移すことをしないで必ず起こしてから連れていく。寝ているときは魂が身体を離れていることが多いため、急に子供の居場所を移すと魂がその場所を分からなくなるという。また暗闇の中では子供の名前を直接呼ぶことを避ける。何故なら鬼がその名前を知りその子の魂を連れていく恐れがあるからである。」

そこでモンゴル・シャマニズムにおける霊魂とは次のように考えられているといえよう。人間が死んでもその霊は死なない。しかも活動的であり、子孫のまわりにいるのがほとんどである。また霊は恐ろしいもので人を助けることもできるし、加害を与えることもできる。しかし霊を大切にし、保存するなどの対策を採っていれば、人が死んでも霊は永遠に生きられる。更に霊魂は暗黒な場所や恐れをなしたことによって肉体を離れる場合もあると考えられ、昔の人々は色々と工夫し、霊魂をなるべく肉体から離さないようにしていた。

三つの霊魂説

ホルチンの人々の間では、人間には三つの魂があって、その人間が死ぬと、一つ目の魂は墓のそばにいて、二つ目の魂は外回りし、三つ目の魂は再生し、生まれ変わっていると考える人もいる。この生まれ変わる魂は再生のとき更に繁殖し、三つになると信じられている。しかしこうした考えは、おそらく仏教伝来によって、生まれた新しいものであると考えられる。少なくとも上記したように本来のモンゴル・シャマニズムの宗教観では霊魂の再生はなかった。人間の魂が輪廻する説は、仏教の中にあったにせよ、それが今ほど本格的ではなかったと考えられる。これはチベット仏教のカルマ派と

[注] 『元朝秘史』では、ジャムハはチンギスハーンの幼なじみ、旧友とされる。

ゲルク派によって発展させられ注）、確実に転生ラマが誕生するようになる。そしてチベット仏教がモンゴルに流入することによって、この宗教文化がモンゴルに入ってきたと考えられる。

三つの霊魂説に対し、フルブはＢ・リンチンの説を引用してこう説明している。「人間には三つの魂がある。この中の二つは死に、一つは死なない。この三つの魂は、母親からもらえる血と肉の主（あるいは魂）、父親からくる骨の主（あるいは魂）、天の魂の三つである。人間が死ぬと血と肉の魂は三年間その人に付いてからなくなる。つまりその人の肉が完全腐敗してなくなるまで、骨の魂も骨がなくなることによってなくなる。天の魂は最後に天へと浮いていく」「フルブ2006,138頁」とある。

ところがボインバトは「モンゴル・シャマニズムの考えでは、人間には三つの魂があり、常に付着している主要な魂、世を回っている空の魂、そして死んだら墓を守る墓の魂の三つがある」「ボインバト1985」と言っている。

ボインバトのこの説はホルチンの庶民の中にも言われるもので、死んだら墓を守る魂は死ぬ前に祖先の墓のところにいるという。何れにしてもこれらの説からは本来モンゴル・シャマニズムの「三つの魂」をまとめることは困難であるが、モンゴル・シャマニズムには三つの霊魂の説があったことは認められている。しかもあとの二つの説は、どちらもかなり古くから伝わるものだと考える。そこには魂が生まれ変わることもなければ、地獄に行き審判を受けることもないのがこの説の古いものであることを物語っていると思う。この他一致しない部分にしても、モンゴルは地域的に広いことから研究者たちの調査する地域とシャマンの伝統や系統の違いによって、異なった結果が得られるのは当然ありうる。

まとめ

これらの神話や伝説、古老やシャマンの話そして書物などからは、こうした昔話や伝説の時代差を何らかのかたちで区別することができる。つまりどちらが古いものか、あるいは比較的新しいものかを選別することができる。それには、古いものほど霊魂の生まれ変わりや地獄などの精神世界での圧迫がないようで、逆に新しくなるほどこうした傾向が深まるという特徴があるからである。更に一部の学者の見解や研究結果などから、古代モンゴルにおける宇宙観と霊魂観が、以下のようにまとめられる。

注）カルマ派（黒帽派とも言う）のラマ、ランジュンドルジェによって初めての伝生ラマが誕生する。そしてのちのゲルク派がこの制度を取り入れる。二世ダライラマとされるゲンドウンギャムツオの死後その転生としてソナムギャムツオを選んだのが始まりである。

つまり古代モンゴル人における宇宙観とは、垂直なもので天・地とその間の空間からなり、この天・地の間の世界に人間や動物が住んでいる。地下はあってもそこには、水や土があるのみで、地獄があるという概念はなかったのである。また古代モンゴル人における宇宙観と霊魂観は、現代の宇宙観、霊魂観に比較するとかなり簡素なものである一方、何らかのかたちで科学的説に近い現実的な点が多いようである。人間は大地から生まれ万物から栄養を取っている。人間や動物の世界は地上にあり、天・地の間の宇宙空間にあり、地下は土と水があるというものであった。

人や万物に霊魂があり、霊魂は何かによって殺されない限り不死である。人間は死んでも霊魂はあの世で現世と同じく生活する。つまり現世で飼っていた家畜の霊を飼い、現世で支配していた人たちの霊を支配し、現世での親戚関係も保てる。霊は子供や病気中である人の身体から離れやすい特徴をもっているなどである。

いまで言ういわゆる多層宇宙論や地獄の世界、霊魂への審判は仏教伝来後のもので、本来のシャマニズム的宇宙論と霊魂論とは異なるものである。伝統的モンゴル・シャマニズムの考えでは人間と万物は天と地のあいだに住み、死ぬと霊魂が霊の世界で現世のような生活をすると考えられていた。

13世紀40年代にモンゴルを訪問したヨーロッパ人使者プラノ・カルピンはこのように書き残している。「彼らタタル人は、人を殺す、他者の土地を攻略する、他者の財産を略奪する、淫乱する、神の命令を逆らうことなどを罪と思わない。」「ゲレルチョクト訳1983,83頁」と書いてある。これは当時のキリスト教徒から見たモンゴル人への一方的な評価であるに過ぎないけれども、少なくとも部分的にこのような性格をもっていたことは確かだろう。またフルブは「とりわけモンゴル・シャマニズムでは、忍耐や我慢するのではなく、勇ましく戦うことを励ますという考えはある」「フルブ2006,27頁」と指摘している。

こうしたことから、現世でのガルマが来世のすべてを決める。またはガルマによって、魂が地獄に落ちるなどの霊魂観をもっていなかった当時のモンゴルの人々はとても勇敢であった。これこそがモンゴル帝国軍の強さのもう一つの武器だったのではないかと考えられる。

参考文献

日本語

芝田研三『満州宗教誌』満鉄社員会1940

『元朝秘史』小澤重男（訳）岩波文庫(上)1997

煎本孝「モンゴル・シャマニズムの文化人類学的分析『東北アジア諸民族の文化動態』」北海道大学図書刊行会2002

加藤謙一『匈奴帝国』第一書房1998

宮脇淳子『モンゴルの歴史　遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房2002

モンゴル語の文献

O・フルブ『蒙古薩満教』民族出版社2006

満昌、著『蒙古薩満』内モンゴル人民出版社1990

エルデムト『蒙古薩満教及其思想史』民族出版社2001

『普蘭・卡爾賓、維廉・魯布克蒙古遊記』ゲレルチョクト訳、内モンゴル教育出版社1983

ニマー『霊魂、偶像、信仰』内モンゴル人民出版社1999

ロブサンチュイダン『蒙古風俗監』内モンゴル人民出版社1981

H・ボインバト『蒙古薩満教事略』内モンゴル文化出版社1985

A・トマン（等）『蒙古人与三大宗教』内モンゴル人民出版社2001

クルリシャ（等）『科爾沁薩満教研究』民族出版社1998

ハイシッヒ『蒙古的宗教』アラタンバガン（訳）内モンゴル人民出版社1998

中国語の文献

孟慧英『中国北方民族薩満教』社会科学文献出版社2000

白翠英（等）『科爾沁博芸術初探』内部資料（刊年不明）

拉施特『史集』商務印書館1986